

13 中国伝統医学と道教(第二〇回) 籤

吉 元 昭 治

以前、本学会総会で「葉籤」について発表したが今回は「おみくじ」について発表する。

「おみくじ」は「おふだ」「お守り」と、三点セットになつてどこの神社仏閣でも見ることが出来る。「おみくじ」は「籤」「鬮」「孔子」あるいは「神籤」ともいい、台湾・香港などでは「靈籤」と称している。

「籤」とは未来を予言する識を細長い竹札あるいは紙に記したものをいう。この歴史は古く、中国ではすでに『荆楚歳時記』にその前進ともいうべきものがみられ、唐代にはその形もとのつて来たが、実物が残っているのは南宋頃のものという。

籤はそのひき方で次のように分類される。

玉籤……神意が書かれている小石や紙などを散らして

おいてその一つを撰んでとる。現在では京都赤山禪院、上野五條天神では木製の小さい人形の底に穴をあけ、籤をはさみ、並べておいてその一つを撰んでとっている。
引籤……わらしべ、紙よりをつくり関係者が同時にひくもの。

突き籤……江戸時代、神社で行われた富札がその代表。
振籤……竹筒に番号を記した竹串状の籤を入れ、振つて出て来た番号に相当した籤が神意が降つたものとする。広く行われている抽籤方法である。台湾などでは「筮」を擲つてさらに神意を確かめているが、この際自分の氏名、年令、住所、願い事を神前に告げる。

籤は中国由来のもので、道教でも殊に符録派では重視していた。『正統道蔵』中には、『四聖真君靈籤』の他に九種あるが、内容的に同一のものはなく、四十九首から三六五首までのものがある。さらにこのうちの二種には吉凶判断がなく、他は「上上、中平、下下」という簡単なものから十五の吉凶判断の段階までのものがある。

日本の籤は「元三大師籤」系統が代表的で、数も多い。元三大師とは天台宗第十八代座主の慈恵大師(良源、九一

二一九八五のことで、正月三日に亡くなったのでこういわれる。

演者が所持している古いものは八種あるが、最も古いものは正徳三年(一七一三)、元和二年(一六六二)版の天和五年改正(一七八五)版がある。この籤には大吉十六、吉三五、半吉十二、小吉一、末吉六、凶三〇で、その吉凶比は七対三となっている。台湾台北烏来の妙心寺には全く同一のものがある。

台湾、香港などで収集した靈籤類は九種で、関聖帝君・観音仏祖・天后・黄大仙・呂帝などの冠名があり、百首になっているが、内容的に同一なものはない。吉凶判断はこのうち三種にはなく、他は「上・中・下」の三種から八種の吉凶階級がある。これらのうち「天后靈籤」は古い形を伝えている。

籤は最近のものでは、誰でも分る平易な言葉で書かれているものも数多く出て来ている。中には、縁起物の、おかめ・熊手と小判・ゑびす大黒・招き猫・無事かえる・銭亀・だるまなどを入れ付加価値をたかめているものもある。

籤は多くの神社仏閣、つまり神道と仏教を問わずおいであり、籤は自分の運勢・運命の他に、病気の病勢・予後・手段等も記されているから、民間信仰と民間療法とが重なっているものだともいえよう。

この科学万能と思われる時代にあってもなお人々は自分の運命を神仏の手にゆだねて吉凶を占っているのである。

(順天堂大学医学部産婦人科学教室)